四国中央市 歴史探訪

カタチが変わる

—型式学の世界—

「カタチ」が変わる。

わたしたちがごく自然に目にする身の回りの「モノ」たち。それらは、時や場所を隔て、カタチを変える。普段は生活と共にあり気に留めることもないが、知らず知らずのうちにカタチが変わる。

考古学は「モノ」から歴史を復元する学問といわれる。モノのカタチの変化は、考古学が時代やその変化を知るための、基本的で最も重要な手掛かり。小さなかけらに導かれる、型式学の世界。

「どうして土器のかけらひとつで、時代が分かるの?」はじめて考古学に接したときの素朴な疑問です。

モノの変化から歴史を紐解く考古学の、最も基礎的で、最も重要な方法に「型式学(けいしきがく)」と呼ばれる手法があります。

モノのカタチの変化から、数百年、数千年前の人々の営みがみえてきます。

モンテリウスと型式学

「型式学」の基礎を築いたのは、スウェーデンの考古学者、オスカル・モンテリウス(1843-1921)といわれます。

モンテリウスは、生物が時間とともにしだいに変化したことを説いたダーウィンの進化論から着想を得たといわれ、当時馬車から蒸気機関に置き換わった鉄道客車の変化などに着目し、人が作ったモノもまた、時間とともにその形を変えていくことを明らかにしました。

これは、当たり前のようでもありますが、意識的・無意識的に遺跡に残された物質資料=「考古資料」を対象とする考古学にとっては、画期的な視点でした。

カタチが変わる、今、昔。

身近な例で言えば、初めて実用化されたO系新幹線から最新型に至る過程で、より空気抵抗を少ないカタチへと変化していることが読み取れます。

このようなカタチの変化は、時代を超えて縄文土器や弥生土器、須恵器といった、考古資料からも読み取ることができます。

また、ヒトの「尾てい骨」のように、機能の失ったのちにその痕跡が残されることがモノにもあり、これを「痕跡器官(ルジメント)」と呼んでいます。

現代の伝統的な服飾品にも、このような例がしばしばみられますが、土器やしだいに実用性が失われる弥生時代の青銅器などにも顕著にみられます。

考古学者の100年に亘(わた)る型式学的研究は、数十年、数百年かけて徐々に変化してきた土器の変化を、あたかも時の物差しのように編むことによって、時代の指標としてきました。こうして作られた「土器編年」は研究の一つの集大成といえます。

そして、小さな土器のかけらは、歴史の証人として語りはじめる。

◀須恵器のカタチの変化

6世紀前後の須恵器〔蓋坏(ふたつき)(坏身(つきみ))〕の形態変化。「蓋坏」は坏身と坏蓋がセットになった容器。上写真は坏身の口縁部(口の部分)の蓋を受ける「たちあがり」が、新しくなるにしたがって、徐々に短くなっている様子が分かる。

歴史考古博物館企画展「カタチが変わる —型式学の世界—」

今回紹介した**型式学の世界**を実物資料を交えながら紹介します。
今まで知らなかった世界、考古学のトビラをあけてみませんか?

期間:7/17(土)~11/14(日)※月曜休館
〔8/17(火)と10/5(火)に展示を一部更新予定 ※クイズも同時更新〕
場所:歴史考古博物館(川之江町2217-83)
☎28-6260

はじめての考古学 考古学へのトビラ

会期中イベント
◆考古学クイズイベント(常時)
◆土器洗い体験 ※要申込
8/7(土)・8/21(土)
10:00~11:00

四国中央市 歴史考古博物館 -高原ミュージアム-